

先生の授業の思い出

五之治 昌比呂

私が三回生に上がって西洋古典学を専攻することになったのは1990年であり、1994年に修士課程を修了すると同時に先生は京大を退官されているから、私が学生として先生の授業を拝聴することができたのは四年間だけである。それからの年月を数えても、私が先生に接することができたのは、わずかに十年弱ということになる。その十年の間、学問に関してもお人柄に関しても、私は先生に対して常に尊敬の念を抱いてきた。だが、そのことをここで長々と述べてもあまり意味がないであろう。先生の偉大さは誰もが認めるところであるから。私は、先生の授業で最も印象に残っていることをひとつだけ書きたいと思う。

演習でウェルギリウスの『農耕詩』を講読していたときのことである。『農耕詩』の第二巻はもっぱら樹木のことを扱う巻であるが、その始めのところで、植物を人工的にふやす方法に関する記述が出てくる。私はこのような方面の知識を全く持ち合わせていなかったから、予習で辞書を引き引き読んでみても、ほとんど意味が分からなかった。そしてそのまま授業にのぞんだのだが、岡先生は一枚のハンドアウトを配られた。それは家庭園芸の入門書を切り張りしたもので、イラストとともに園芸植物のふやし方がたくさん紹介されていた。余白には先生の手書きで、該当する『農耕詩』の詩行が書き込まれている。これを見て初めて、単に「茎」としか理解していなかった *stirpes* が、実はさし木の「さし穂」を指すということなどが分かったのだ。これはたいへんな驚きであった。一見瑣末な事柄に思えることを、このようにきちんと説明してもらうという経験があまりなかったのである。もちろん、些細な事柄もないがしろにしない先生の学問的態度に敬服し、これを見習うべきであると思った。

同じようなことは先生の授業で何度も経験することになる。例えば、古典文学には星に関する記述がわりあいたくさん出てくる。授業で読んでいるテキストにそのような部分があると、先生は必ずハンドアウトを用意して、きちんと説明して下さった。星のこともまるで分かっていなかった私は、先生の説明を理解すべく、あわてて天文に関する入門書を買って読んだ覚えがある。作品

に機織りに関する記述が出てきたときも、古代の機織りに関するイラスト入りの詳しいハンドアウトをいただいた。それで初めて、古代では縦糸を上から下に垂らして織っていくということなどを知った。それだけではない。我々学生に機織りの原理をより直接的に示すために、先生は機織り機を授業に持ってこられたのである。もちろん、これは子供向けの玩具として市販されているものであったが、原理は本物と全く同じとのことで、実際に手に取ってみれば機織りの仕組みが一目瞭然に分かるのであった。

今から思えば、こうしたことは教師の立場としては当然のことなのかもしれない。しかし実際に授業をする際、細かな事柄まできちんと調べ、手間をかけてハンドアウトを作るということを、いったいどれだけ実行できるであろうか。自分が教える立場になった今、できる限りそうしようとはしているが、とても岡先生のまねはできないと、つくづく思う。

分かっていると思いこんでいることでも、本当には分かっていないのだ。先生のハンドアウトを眺めていると、そのような戒めが心にわいてくる。逆に言えば、一見些細に見える事柄でも、それを丹念に調べることで、それまで見えなかったものが見えてくるということである。そして、そのような新しい「読み」を提示することこそが、人文学の醍醐味なのであろう。先生は、同じテキストを目の前にしていても、我々には見えていないものを常に読みとられていたにちがいない。もはや先生の新鮮で深い読みに触れることができないと思うと、残念でならない。